
巻 頭 言

論 文 へ の 誘 い

院長 平岡 眞寛

本年の Medical Journal of Japanese Red Cross Wakayama Medical Center (日本赤十字社和歌山医療センター医学雑誌：以下当誌)をお届けします。昭和58年に刊行を開始した当誌ですが、その後昭和の6年間、平成の30年間一度も途切れることなく出版され続け、新年号である令和において刊行できますことは大きな喜びであります。その間、ご尽力いただいた学術委員会の関係者に感謝しています。

学術論文は、大きく、総説論文、原著論文、症例報告の3つに分かれます。総説論文は、一般的に総説、レビューと呼ばれており、特定の分野やトピックについて、過去に発表された文献や資料を基に総括的に論評したものです。その分野がどのように状況にあり、どんな進歩が得られつつあるか効率よく貴重な情報を得ることができます。

当該号においては、奥村慶之形成外科部長らによる「小児術後の全身麻酔下抜糸の取組み」、中岡達雄小児外科部長らによる「新生児スクリーニングとしての腹部超音波検査」、山下好人消化管外科部長による「胃癌に対するロボット手術の現状と我々の工夫について」の3編が掲載されています。いずれも最近のトピックスの最新情報をわかりやすく紹介するとともに、自らの意欲的な試みについても記載されており、魅力的な総説に仕上がっています。教育効果にも高いものがあります。

第二のものは原著論文です。論文といえば通常この原著論文を指します。新たな視点で研究を実施し、得られた発見、意義深いと思われる研究成果を読者に伝える論文であります。この原著論文の質と量が雑誌の格を決定すると言っても過言ではありません。

今回、10編の原著論文が掲載され、昨年の4編から大きく増加しました。いずれも、著者のアイデアと当センターの豊富な症例により実現した価値ある論文です。嬉しいことは、投稿者の何人かがCLiP履修生であることです。CLiPは、京都大学大学院医学研究科で実施している臨床研究・研究者養成プログラムですが、このプログラムに1年間の社会人コースがあり、医学生物統計について系統だった教育を受けることができます。3年前からに当センター内で希望者を募り毎年10名前後が受講しています。履修を完遂し修了証を取得した者にはコース履修費用を病院が補填しましたが、全員が履修を完了しています。本号においては、そのCLiP履修生から3編の原著論文が掲載されています。従来から、研究の実践とその成果を学会などに発表する、論文文化することの重要性を発言してきました。当センターが抱えるスタッフの量・質・診療実績を考えると、研究の現状は決して満足できるものではありません。研究を通じた当センターの更なる発展を目指して欲しいと願っており、その先導役の中核をCLiP修了者が担うことを期待しています。

学術論文の3つめが症例報告です。医師は、一般的に知られたものとは異なる症状、すでに知られている疾病の合併症、治療に対する異常な副作用や有害反応、あるいはよくある症状に対する新しい対処法など、従来とは異なる珍しい患者の事例に遭遇することがよくあります。症例報告とは、そのような疾病の兆候、症状、診断、治療について論じるものです。症例に対する直接的な観察事項を提供するものであることから、症例報告は医学文献の最も重要なエビデンスです。新たな疾患、

疾患概念に繋がった歴史的な症例報告に枚挙はありません。

症例報告は、初めて論文を書く医学生や研修医にとって、着手しやすい論文形式でもあります。初期研修医あるいは専攻医の若手医師には、是非、日々の診療に目を凝らし興味深い症例を発掘するとともに、指導医の力も借りて、症例報告の発表さらには論文化を実現して欲しいと思います。たかが一つの症例報告と思うかもしれませんが、その1編が医師人生を大きく変えるポテンシャルを持っていると小生の長い教員生活から自信をもって言えます。